



あさり資源の再生～地元アサリ稚貝の確保に向けた取り組み～

前潟干潟研究会

大野瀬戸について

前潟干潟研究会の活動場所である大野瀬戸は、広島湾奥に位置する海峡であり、日本三景である安芸の宮島と対岸の廿日市市の間にある風光明媚で栄養豊富な場所である。

大野瀬戸で育まれるアサリは、「大野あさり」の愛称で親しまれ、手堀り一筋で選別出荷されるため、大粒・美味な地域ブランドとして知られている。

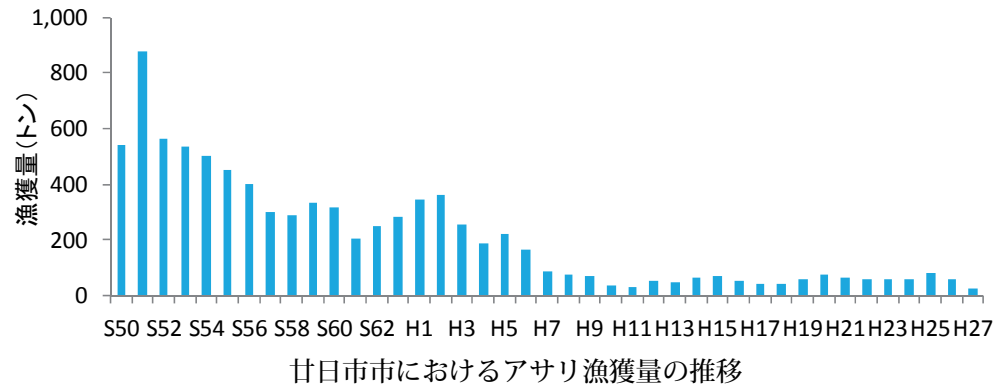


アサリ資源の現状

アサリは、大野瀬戸に点在する複数の干潟に生息する。アサリ漁業の歴史は古く、漁業者が100年以上前から干潟を杭で区分し、各人が手を入れ、守り育ててきた。

現在、大野瀬戸を有す廿日市市のアサリ漁獲量は県内一であり、直近5年では県内アサリ生産量のおよそ半分を占めている。しかし、漁獲量は、ピークであった昭和51年の876トンに比べて、60トン程度まで大幅に落ち込んでいる。

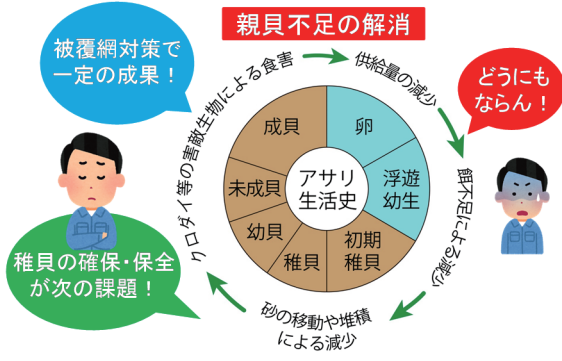
アサリ資源が大きく減少した理由は、干潟の減少、海域の貧栄養化、クロダイ等による食害など、複合的な要因によるものと考えられる。そして、現在問題となっているのは、資源の大幅な減少によるアサリ親貝の不足、それに伴う稚貝供給量の低下である。



アサリ資源再生活動のスタート

当該地区では、課題である「親貝不足」を解消する第一歩として、平成10年頃から被覆網を活用した食害対策を導入し、平成20年頃には一般化した。

その結果、漁場での親貝保護に目処が立ち、アサリ漁獲量の減少を何とか食い止めることができています。しかし、アサリ資源は低位横ばいであり、資源の早期回復には、再生産に寄与する地元産稚貝の確保が必要と考えられた。そこで、「前潟干潟研究会」を結成し、次のステップとして、地元稚貝の確保・保全を目標に取り組みをスタートさせた。



地元稚貝の確保と保全

1) 設立当初の取り組みと課題

本研究会の活動の短期目標は「地元産アサリ稚貝の確保技術の確立」である。

設立当初は、全国的に流行した「網袋採苗」（以降、従来法）に取り組んだ。稚貝確保のために選らんだ場所は、春先に米粒大のアサリが数多く生息する長浦干潟であり、良い成果が期待された。しかし、結果は、以下の課題から1袋あたり平均45個程度の確保に留まった。

【従来法の課題】

- ① 長期間設置のために網袋が埋まる・流される。
- ② アオサが網袋の内外に生えて阻害する。
- ③ 視認できない微小稚貝が流れてこなければ、効果が得られない。（場所の選定が難しい）

2) 新たな方法「大野方式」の考案

従来法を改良した「大野方式」は、稚貝確保の技術課題であった確実性と長期設置を克服し、より確実で効率的な方法へと前進した。

大野方式の特徴は「視認サイズの稚貝を表砂ごと採取する」ことにある。アサリ稚貝の集積場所さえ見つければ誰でも確実に採れ、短期間で完結することができる。（稚貝確保のフローは以下のとおり）



アサリ稚貝の確保「大野方式」のフロー（写真は、稚貝採取・育成方法）

活動の成果

稚貝回収量は、大野方式の本格試験を行った平成28年度に268万個（3,400袋作製）にのぼった。今年度は、本研究会の成果が構成員以外の地元漁業者に理解され、動員数を増やすことができ、中期目標値である400万個の稚貝確保を実現させるための規模（1万袋作製）で稚貝の採取・保護育成が図れた。

一方で、新たな課題も見つかった。それは、採取場所の問題である。今年度、採取場所の稚貝密度が昨年度の1/3に留まった。そこで、複数の採取場所を候補地として調査・選定し、取り組みを実施し、2年続けて200万個以上の稚貝を確保することができた。

稚貝の集積場所は、年によって変動する。今後の方針は、複数の干潟で稚貝分布密度調査を実施し、場所の選定を行い中期目標値の実現を図る予定である。

	実績		
	設置袋数	参加者数	回収個数
H27	458	83人・日	59万個
H28	3,400	170人・日	268万個
H29	10,400	530人・日	220万個

